

全ての人に情報を届けたい!

点訳・音訳ボランティアの活動に潜入!



発声練習は
欠かせません!



原稿を読んで互いに
意見を出しあう時間を
大切にしています

ど前にカセット録音からCD録音が主流になり録音時間が大幅に増えたことで、提供できる録音図書の幅が一気に広がりました。現在はデジタル録音図書(DAISY)が全国的に普及し、視覚障がいのある方が気軽にダウンロードして視聴できるようになりました。

「より良いものを録音図書のリスナーに届けたい」との思いから録音前の準備を大切にしており、イントローションやアクセントの位置など細かい部分までV同士で意見を出しあっています。リスナーの秋山朝之さんはVとしても活動しており、当事者ならではの視点で団体を支える貴重な存在。「切磋琢磨しながら向上しあえる関係に感謝している」と顔をほころばせます。

互いに支えあって

点訳は、点字盤を使用して用紙に点字を1点ずつ打った後、打ち間違いが

そのほか、点字教室の講師や広報紙の点訳など、所属する13人のVが協力し、幅広く活動をしています。

「たすけあい虹の会 東大阪」では昭和59(1984)年の設立以来、読み聞かせ用の点訳絵本を作成しています。絵本は、寄付や活動費を財源としてボランティア(以下、V)が自ら選書。全日本視覚障がい者協議会 女性部を通じて、昨年度は300冊近く贈呈しました。毎年感謝の言葉が団体のもとに届くなど、地道な活動は多くの方に必要とされています。

●東大阪市 点訳ボランティアグループ たすけあい虹の会 東大阪

長い歴史をもつ点訳・音訳活動において近年、自動点訳や音声読みあげなど、新たな技術が開発されています。一方、地域で長年手作業での活動をつづける団体も数多く存在します。そこにはいきいきと地域で活動するボランティアの笑顔の輪が。集まって活動する中でしか得られないやりがいがあると感じました。今回は点訳・音訳それぞれの分野で活躍するボランティア団体の活動に潜入しました。



▲左から福田千恵子さん、平阪恵子さん、代表の片野利映さん

ないか校正します。最後に、視覚障がいのあるVが指先で読み、間違いがないかを確認。ようやく1冊が完成します。Vは自宅で点訳作業を行い、郵便で校正担当のVとやり取りを重ねています。はじめて点字を覚えるVがほとんどで、はじめは慣れない作業や点字のルールに苦労することもあります。V同士で助けあっています。



▲左から千股くに子さん、秋山朝之さん、代表の山本雅代さん

成長しつづけて

Vの高齢化から、今後新たな活動者に来てほしいと思っています。年に1回、行政と社協が共催で実施する講座を通じ、団体の周知に取り組んでおり、今年度は1人の入会につながりました。

「自身の学びを団体の活動へ還元し、全員で成長していきたい」と力を込めて話すのは、代表の山本雅代さん。音訳の勉強会に参加し、ノウハウを他のVに共有しています。

「活動を通して学ぶことが多く、V活動しているのではなく、させていたでいる感覚」と話すVの顔はいきいきとしています。

これからの活動に目が離せません。

点字を打つ作業に
取り組んでいます。



校正した絵本を読んで
最終確認中!

となり、休憩中には近況報告に花を咲かせています。点訳の知識を得るだけではなく、視覚障がいのある方の生活を知ることができ、V自身の視野も広がっています。

「子どもの喜ぶ顔が見たい」「もともと点字に関心があった」など、きっかけは人それぞれですが、やりがいをもって活動をしています。

子どもたちのような場所に

小学校での出前授業では「障がいについてもっと知りたい」という声が聞かれ、V活動が障がい理解の促進につながっています。活動をつないでいくために、未来の担い手である小学生へ

Vが一丸となって

録音した音声はV同士で確認しあい、校正を重ね、編集し完成します。15年ほ

現在の主な活動は、広報紙や雑誌の音訳。創設当初から発行する団体の機関紙「声の雑誌『風鈴』」では、幅広いジャンルからV自ら記事を選びます。そのほか、平成17(2005)年以降行政から依頼を受けた「声の広報」の作成や、個人や図書館から依頼があれば録音図書の作成をしています。

の周知にも取り組んでいます。

「完成した絵本を見るとうれしい」「活動が純粹に楽しくつづけている」と話すVの顔は笑顔であふれています。

「Vのよりどころのような場所として、団体が未永く継続してほしい」と話すのは代表の片野利映さん。今後も活動はつづきます。

●羽曳野市 音訳ボランティアグループ 風鈴(ふうりん)

地域で活躍する

民生委員・ 児童委員さん

(NO.43)



千早赤阪村小吹台地区
田中 鈴代さん (民生委員歴9年)

Q 質問数珠つなぎ
Vol.42 長山さんから質問
地域の人をイベントに誘うための工夫は?

A まずは、来てほしい人に直接声をかける。そこから人と人をつないでいきます。

このコラムは、地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。今回は、人権擁護委員として活動し、主任児童委員としても活躍する田中さんにインタビュー。活動で大切にしていること、今後の抱負について聞きました。

● 受容を大切に

人権擁護委員として、高齢者や子ども等に関する人権相談の対応や啓発活動を約20年行っています。主任児童委員の活動と共通して心がけていることは、相談される方の話をよく聞き、受け止め、受容すること。相談者から、「話を聞いてもらってほっとした。ありがとう」と言われ、前に進もうとされる姿を見るとうれしくなります。

● 一緒に楽しむ

小学校のフリー参観日にも主任児童委員として参加し、子どものお様子を見守るだけでなく、お母さんたちに話しかけ、顔を覚えてもらえるような関係づくりをめざしています。子ども園でのふれあい交流会では、子

どもと一緒に、盛りあげながら遊びます。自分も楽しむことで子どもも自然と笑顔に。子どもたちに元気をもらっています。

● サポート体制の充実を

子どもが抱える課題を解決するため、学校に配置されているスクールソーシャルワーカー(SSW)との連携強化を模索していました。今年度からSSWに直接アプローチし、主任児童委員との情報交換会を実施。地域の気になる児童のようすや学校での不登校児への支援など、情報共有しました。今後も、社協や教育委員会とも積極的に連携し、サポート体制を充実させたいです。

● みんなが enjoy!

子どもの数は少なくなっています。だからこそ、今ある地域のイベントをより充実させ、村の子どもたちが楽しく、のびのび生活できるよう、横のつながりを広げたいと思っています。

楽しくポジティブに、自分のベストを尽くし、みんながenjoy!できるよう、今後も地域を盛りあげていきます!!